

中世争乱の舞台としての有馬 —落葉山城を中心に—

要旨

三好 俊

神戸市北区の有馬は、日本有数の温泉地であるとともに、長い歴史を伝える地域でもある。その発展は、特に中世にみられ、織豊期における豊臣秀吉による支配を経てピークを迎える。しかし、温泉地として発展していく一方、有馬は中世の争乱に巻き込まれることとなった。その舞台の一つに、現在は遺構のみが確認できる落葉山城がある。落葉山城は、限られた範囲ではあるが文献史料においても動向をみることができ、特に三好宗三が城主であった天文年間に起こった合戦の様子がわかる。この合戦は、三好氏や別所氏といった摂津・播磨国に拠点を置く勢力の争いの中に位置づけられる。三好宗三が退城した後、落葉山城は有馬氏の支配下となり、重要拠点からは外れることとなった。織田信長の侵攻に備え整備が行われるものの、有馬は近隣地域とともに平定され、役目を失った落葉山城は廃城となった。有馬は、古文書・記録、または近世の地誌類によつて歴史をひも解くことができ、温泉地としての発展だけにとどまらず分析を加えることで、より広範囲の歴史像を復元できるものと考ええる。

はじめに

神戸市北区にある有馬は、今日も多くの人々が訪れる日本有数の温泉地である。そして、著名な観光スポットであると同時に、長い歴史を伝える地域でもある。古くは舒明天皇や孝徳天皇の行幸があることが『日本書紀』^一にみえ、白河上皇や藤原道長などをはじめ、都からもさまざまな人々が訪れていた。

その発展の契機は中世にみられ、十五世紀後期の禅僧万里集九は、その著作「梅花無尽蔵」^二において、日本三霊湯に草津（群馬県）、湯島（岐阜県下呂温泉）とともに、有馬温泉をあげている。有馬温

泉は「湯山」と呼ばれ、『有馬温泉史料』^三をみると、公家・武士・僧侶の湯治の記録が多数確認できる。当時の都である京から最も近い温泉であるという好条件も影響していると考えられる。

そして、中世における有馬温泉繁栄のピークは、織豊期にみられる。豊臣秀吉は、織田信長の家臣であった天正五年（一五七七）より中国地方平定を目指し、摂津・播磨国へ進出し、このころより有馬温泉との関係を築き始めた。そして、本能寺の変により信長が死去した後の、天正十一年八月十七日^四を始めとして、慶長三年（一五九八）八月十八日に死去するまでの十六年間の内、一〇回も

有馬温泉を訪れた^五。また、有馬を蔵入地として直接支配し、自身のみならず一族へも有馬温泉の利用の便宜を図り、新たに御座所・御屋敷を造営している^六。平成七年（一九九五）に発生した阪神・淡路大震災によって倒壊した極楽寺庫裏の地下より発掘された湯山御殿跡^七は、そのことを今に伝えている。

これらの前段階として、秀吉は有馬周辺に対し、戦火から避難していた住民の還住を促し^八、商売など諸活動へ保護を加え^九、戦乱で荒廃した地域を復興させたと評される。では、秀吉が復興させる前の有馬はいかなる状況であったか。有馬は戦国期の争乱で荒廃したとされるが、享祿元年（一五二八）^十と天正四年（一五七六）^{十一}の大火が取り上げられる他は、どういった経緯をもって有馬が戦場になり、どのような勢力が対立したかなど、取り上げられることはあまりないように感じられる。このような問題に対し検討を加えることは、戦国期の争乱の中で有馬がどのような位置にあったのかを考察する上で重要な蓄積になるだろう。

そこで、本稿では戦国合戦の記録に残る、有馬における拠点である落葉山城を取り上げ、居住者や争乱の経緯について検討を加えたい。

一．戦国期の有馬と落葉山城について

戦国期の有馬は、多くの人々が訪れる湯治場であったとともに、交通の要衝であった^{十二}。京、大和国、播磨国とつながり、「およそ溪間の旅宿は、西より東より、北より南より、浴沐の往還来復、千万

人を識らず」^{十三}と評されている。また、有馬郡内には三本松、湯山両関、船坂両関、生瀬関の6つの関が設置されていた^{十四}。中世における往来の多さを考えると、大きな収入をもたらしたであろう。有馬を支配することによる収入源の獲得は、秀吉の段階においても確認できる。秀吉は、有馬の善福寺・掃部（奥之坊）・池之坊を現地の代官に任命し、年貢や地子銀を貢納させている^{十五}。有馬を支配する勢力は交通の要衝を抑え、大きな収入源を得ることとなったと言えるだろう。

落葉山城は、このような有馬の中心地、有馬温泉街の西側に見える標高五三三メートルの落葉山山頂に築かれていた。落葉山の名は、温泉中興の仁西上人に白髪が行者が山頂から落とした葉によって、温泉の位置を知らせたという故事にちなんでいる。灰形山、湯槽谷山とともに有馬三山の一つに数えられる。現在、落葉山山頂には、廃寺となった日蓮宗金剛寺^{十六}の妙見堂を明治三十九年（一九〇六）に移して建立された妙見寺が建てられている。有馬の古刹、曹洞宗善福寺南脇に妙見寺参道口があり、山頂へと通じている。そこからは、温泉街全体を見わたせる他、三田及び北播磨方面といった広い範囲を一望することができる。

落葉山城は、「有馬城」「湯山城」とも呼ばれる。後述のように近世には廃城となったために、現在ではその存在が注目されることは少ないものの、『摂津名所図会』^{十七}において「有馬古城」が立項されるなど、江戸時代出版された地誌類では言及されていることを確認できる。また、城の構造を描いた古絵図は、『池田家文庫』（岡

山大学附属図書館所蔵)内に「摂州有馬落葉山古城図」^{十八}がある。絵図中央部に「七間四方」の「本丸」に相当する曲輪が山頂部にあり、そこから南側に数段の曲輪が描かれている。山頂部の曲輪群から北側に山を下り、「う子」と記された土橋が設けられた鞍部を隔て、山腹部に「七間」の曲輪を中心として、東に向かったもう一つの曲輪群が描かれている。これらの山頂部の曲輪群は、妙見寺を中心とした一帯に残る削平地に相当し、この図は曲輪の数や方位、配置の様子などかなり正確に描かれているようである^{十九}。

二・天文年間における落葉山城の合戦

この落葉山城が歴史上において注目されるのは、『摂津名所図会』において「天文年中三好宗三在城して、播州三木の城主別所豊後守と合戦す」、「摂州有馬落葉山古城図」にて「三好宗三暫居城」と記されているように、戦国時代の天文年間(一五三二〜五五)であった。

三好宗三とは、三好之長の弟勝時の子であり、「神五郎」「政長」「半隠軒」とも称している。初期の経歴は不明であるが、応仁・文明の乱、明応の政変を経て分裂した管領細川家の政争の最中である大永六年(一五二六)に本拠である阿波国より畿内へ進出し、細川高国と対立する細川晴元に属し、摂津榎並城主となった。本家当主の三好元長が足利義維を擁立して「堺幕府」を誕生させると、その中枢に入るものの、高国の敗死後は同じく晴元に属する木沢長政・茨木長隆らと結託して元長と対立し、一向一揆を起こさせて元長を討った。

その後は、三好氏の分家出身ながら、晴元の「御前衆」^{二十}となり、後に「三好政権」を確立させる三好長慶が上洛する以前は、晴元の摂津国方面支配の展開の中で活躍している^{二十一}。

落葉山城は、天文年間においては三好宗三が在城していたわけであるが、その築城年代はそれ以前であったと考えられる。落葉山城の成立については、関連史料がないため不明であるが、下田勉氏は、同城が山城であることから南北朝期の成立とし、暦応元年(一三三八)六月日付の貴志義氏軍忠状案^{二十二}にみえる「湯山左衛門三郎」を城主にあてている^{二十三}。三好宗三以前の城主についても考察できる資料がなく、不明と言わざるを得ないが、天文年間以前の大永六年(一五二六)において、落葉山城に近い位置にある湯山阿弥陀堂に対して有馬村則が「任香雲寺殿判形旨」と先代の澄則の時代を踏襲する形で所領を安堵しており^{二十四}、落葉山城も永らく有馬郡守護の赤松有馬氏の影響下にあったものと考えられる。その一方で、三好宗三及び三好氏より、有馬地域に対する影響がうかがえる書状などは確認できず^{二十五}、宗三が一時的な拠点として利用したとみるべきであろう。

では、『摂津名所図会』にて述べられる三好宗三と別所豊後守の合戦について検討してみたい。この合戦の関連史料としては、次の感状があげられる。

【史料1】^{二十六}

今度湯山城夜討之時、被突鐘御忠節、無比類条、為恩賞、野呂分預ヶ置訖、弥可被抽戦功者也、仍状如件、

閏六月六日

村治（花押）

飯尾源三殿

差出は、播磨国美嚰郡三木（兵庫県三木市上の丸町）の三木城主である別所村治（就治、重治とも称す）である。「湯山城」とあるのは落葉山城のことであり、そこで行われた合戦における飯尾源三の戦功が称えられている。

【史料2】 二十七

一、摂州有馬湯ノ谷ノ西、童子山ノ城ニハ、三好宗三楯籠、其勢五百、近国ノ窺便宜、播州三木ノ別所豊後守、是ヲ可攻由評定有ケルヲ、三宅肥前守十三歳、酌取テ在ケルガ、聞之帰我屋、郎等トモニ語ル様ハ、豊州此曉童子山ヲ可攻給由也、勝諸人先陣ヲスベシ迪、鶏鳴ヨリ打立テ、明石浦ヲ見妻手、谷嶺ヲ分上リテ、燧石ノ峠ニ上リ、童子山ヲ見下シ関ヲ上ル、後陣ノ勢モ押寄タリ、城中ニモ関ヲ合テ、秋月五郎左衛門光秋宗三従弟、三人張ノ弓取テ、散々ニ射、敵余多射伏タリ、地形難所ニテ、掛合セ可戦ニモ非リシト也、其夜雨風烈シケレバ、宗三云、多勢ニ無勢始終難戦トテ、河内国ヘ引退シト也、右は、『三好家成立之事』にみえる落葉山城の合戦の記事である。落葉山城を指し、「地形難所」と述べられている点にも注目される。後世の編纂物であり、内容の信憑性には注意を要するものの、「其夜雨風烈シケレバ」との表記より、落葉山城における三好宗三と別所氏との合戦は夜にも及んでいたようである。【史料1】にみえる「湯山城夜討」は、このような中で行われたのかもしれない。

中世争乱の舞台としての有馬 — 落葉山城を中心に —

では、この落葉山城の合戦は天文年間のうち何年に起こったのであろうか。『温泉史料』に引用されている二つの史料をみてみたい。

【史料3】 二十八

落葉山 又曰城山、童子山、中男山、麻立山、抛木山、道場山

此城山号る事は、天文年中の比とかや、三好宗三播磨・丹波を打取とて、五百騎にて楯籠る、時に天文十四年六月、三好宗三政長、近国の便をうかゝふ処、別所豊後守家直、三宅肥前に命して此に合戦あり、休所民部政俊後号中務、今ノ岸下又右衛門先祖也、籠城せん事を願ふ、宗三許し給ハす、是により兵糧及酒肴を献して交厚くす、宗三終に軍利あらずして、六月十八日卯木谷より落給ふ時、政俊を呼て、汝志海よりも深く、在陣中の心入謝するにたらず、吾運を開かは必賞せんとの給ひ、御腰物を給ふとなり、宗三に政俊志を通する事ハ、家臣秋月五郎左衛門ニ由緒あるゆへなりと聞へし、

【史料4】 二十九

政康 弥三郎、始号政俊、天文九年二月号民部

天文十四年六月、三好宗三政長朝臣道場山籠城之時、有忠義賜御腰物、

この二つの史料は、詳細は不明であるが、三好宗三に仕えていた休所政俊という武将の、落葉山城の合戦における功績が綴られたものである。【史料3】により、三好宗三と戦った「別所豊後守」の名が「家直」であることがわかるが、別所家直なる人物は他の史料において全く確認できない。おそらくは、当時の三木城主別所村治

を指すと考えられる。

そして、合戦が行われた年であるが、両史料とも「天文十四年」と記している。しかし、落葉山城の合戦が天文十四年（一五四五）に起こったとするのは誤りであろう。再度、【史料1】をみてみたい。感状は年未詳ながら、「閏六月六日」とある。天文一四年には閏六月は存在せず、天文年間において閏六月があったのは、天文八年である。また、別所氏関係史料を収集、分析した佐藤保氏も、別所村治の花押の形状から【史料1】を天文八年に比定している^{三十}。

【史料1】の年代比定に関して、宛所についても確認しておきたい。宛所は「飯尾源三」となっているが、本来飯尾氏は赤松氏の被官であり、別所氏被官ではない。この感状のやり取りについては、当該期における赤松氏と別所氏の関係が影響している。参考となるのが【史料1】と同じく「飯尾文書」内に収められる次の感状である。

【史料5】^{三十一}

至当要害、尼子去月廿日ニ取懸、諸口相攻之処、数人被射、出て負候段、無比類候、各以□□語、堅固相踐候儀大慶候、御粉骨之旨、淡州へ依申上、被成御感状候、尤目出候、弥御忠節肝要候、既近日御入国之条、御恩賞之儀、可申達候、恐々謹言、

十二月五日

村治（花押）

飯尾源三殿

落葉山城の合戦の一年前である天文七年、出雲国の尼子詮久が但馬国經由で播磨国へ侵攻を開始した^{三十二}。これにより、味方の離反

をも経た播磨国の赤松政村（後の晴政）は淡路島へ脱出することになった^{三十三}。

【史料5】はその間に、尼子氏が別所村治の三木城を攻撃した際に、同城へ入っていた飯尾源三の働きを称するものであり、「淡州へ依申上」り、とあるように、村治から淡路島にいる赤松政村へ報告することとなっていた^{三十四}。【史料1】についても、赤松政村が播磨国へ帰国する天文十年以前のものであり、飯尾源三は三木城の別所村治のもとに属していたとみることができる。

続いて、落葉山城合戦が起こった頃の三好宗三の動向についてもみてみたい。天文八年、三好宗三は室町幕府料所河内十七箇所を巡って三好長慶と対立を深めていく^{三十五}。そのことが関係しているのかは定かではないが、同年の四月二十九日には「丹波蟄居」^{三十六}している^{三十七}。しかし、蟄居後も長慶との対決を見越してか、丹波より進出を始め、山城国嵯峨の清凉寺へ禁制を発給している^{三十八}。有馬の落葉山城への滞在もそのような中で行われたことであつたのだろう。

こういった状況下の三好宗三にとって、落葉山城の合戦での敗戦は大きな誤算であつただろう。別所勢の攻撃を受けた宗三は、「河内国へ引退」（【史料2】）き、城を取り返して、有馬へ戻ることはできなかった。なお、このことは後世においても、有馬の歴史の中で重要な出来事であつたと捉えられていたのか、寛文十二年（二六七二）六月に大坂天満の平子政長によって版行された『絵入有馬山名所記』（内題は『有馬私雨』、序文には『有馬私雨抄』とある）^{三十九}において、絵入で掲載されている。挿絵には、別所方が城の背後の灰形山に布陣して、そこから城攻めを行っており、宗三は

これを支えきることができず、谷伝いに敗走していく様子が描かれている。

その後、三好宗三は三好長慶との対立を深め、天文八年七月十四日、細川晴元とともに妙心寺・西京に出陣する^{四十}。この対立は、足利義晴・六角定頼の調停により和平が成立するも^{四十一}、宗三が有馬へ戻ることはなかった。その後、宗三は変わらず細川晴元の腹心としての地位を保つものの、天文十八年六月に起こった「江口の戦い」において三好長慶に敗北し、討死した。

さて、【史料1】について、『新修 神戸市史 歴史編Ⅱ 古代・中世』^{四十二}においては、落葉山合戦について、他の一次史料から確認できないこと、天文八年閏六月には宗三と長慶の確執が表面化し、宗三が京都を離れるという事態も生じているが十三日前後のことであり、日付が合わないとし、別の解釈を試みている。それは、別所氏が湯山街道（淡河谷）や山田谷沿いに摂津国方面へ向けて勢力を拡大していった中で、有馬氏と戦火を交えることとなり、その中で【史料1】が出され、発給年代も永禄元年（一五五八）となる、というものである。

しかし、【史料5】をみると、合戦から感状の発給まで十五日ほどの日数を要しており、それを【史料1】に当てはめれば、落葉山城の合戦は天文八年の六月中頃に行われたと考えることができ、三好宗三の動向を踏まえても、日付が合わないことはないように思われる。【史料3】【史料4】については、記されている年代は誤りであるが、「六月」という表記は事実在即しているであろう。他に、

別所村治の花押や、村治と宛所の飯尾源三の関係性など考慮すれば、永禄元年の発給とは考えにくい。以上を踏まえ、本稿においては【史料1】はやはり天文八年に比定すべきと考える。

三、三好宗三退城後の有馬と落葉山城

三好宗三が退城した後の落葉山城及び有馬はどのような状況であったか。落葉山城については関連史料がないため、その動向を追うことは困難を極めるが、詳細は不明ながら貴重な史料が『温泉史料』に引用されている。

【史料6】

永禄元年三月、舟坂大屋四郎兵衛といふ者、山論に事よせ、有馬殿へ逆意を含み、湯山古城へ寄来る处、二之湯兵衛兄弟、先懸を致し、大屋を討取る、時に有馬殿より感状を賜ふとなり、舟坂村大屋の先祖ハ、長享の比、船坂下大屋綱吉といふ者あり、其末葉なり、今舟坂村二大屋屋敷といふ所残り、

記載内容より、後世に編纂されたもので同時代史料とは言えないものの、永禄元年（一五五八）に落葉山城をめぐる事件があったことを記している。『有馬郡主赤松有馬氏年譜』^{四十三}においても、おそらく同じ史料をもとに、この事件が取り上げられている。内容としては、船坂（西宮市）の大屋四郎兵衛が山論に事寄せ、「有馬殿」を逆恨みして「湯山古城」に攻めてきたが、これを二之湯兵衛兄弟が討取り、大事には至らなかった、とのことである。

三好宗三が撤退した後、関連史料がないため経緯は不明であるが、

【史料6】からは城が有馬氏のものであったとの認識をみてとることができ、有馬一帯は別所氏より有馬郡主の赤松有馬氏が取り戻し、支配下に置いたようである。

【史料7】 四十四

(飛騨国有馬郡)

名塩村并木下事、御懇望旨無御等閑儀候間、令寄進候、然上者永代可為御進退候、但月別山手・棟別錢并日役・陣夫以下事者、如近年可被仰付候、自然此条々於相違之儀者、雖為何時申合段可令改易候、此外之諸公事并徳政事、向後不可令違乱候、仍寄進之状如件、

天文十九

有馬

八月十六日

村秀（花押）

(教行寺賢勝)
式部卿殿

まいる

右は、有馬郡主の有馬村秀より、同郡内の武庫川の支流、名塩川中流左岸にある浄土真宗本願寺派の一家衆である教行寺賢勝に宛てて出された書状である。教行寺は、永正八年十二月二十六日に三好神一郎によつて出された禁制^{四十五}の宛先に「名塩村寺内」とあることが確認され、名塩村一帯に広がる「寺内」を形成していた。

【史料7】において、有馬村秀は教行寺に、湯山街道上の有馬郡名塩村と木下^{このもと}（木ノ元村）を寄進し、教行寺による寺内建設を認めている。そして、月別山手・棟別錢・日役・陣夫役を賦課し、それ以外の諸公事や徳政令は免除している。天野忠幸氏は、【史料7】で、教行寺が役を果たさない時には改易するという規定が盛り込まれて

いることに注目し、名塩の寺内化は無制限の特権認可ではなく、都市特権が公認されることでもたらされる寺内の富裕化による役の徴収が目指されたとし、有馬氏が浄土真宗勢力の寺内形成の動きを自らの領国内において保護することで経済拠点を作り出した、と評価している^{四十六}。このころ有馬氏は、有馬郡を支配する地域権力となっていたといえるだろう。なお、【史料6】にみえる「有馬殿」とは、有馬郡主在職期間^{四十七}により、【史料7】を発給した有馬村秀である。細川晴元や三好宗三との争いに勝利して当時の政局の実権を握った三好長慶は、このような有馬氏より支持を得ることで自身の勢力下に結集させていき、支配を広げていった。

【史料8】 四十八

就南 御所御領儀、重而御折帋拝見申候、先度如令申候、就数年錯乱段、一向無正躰時宜候、可然様御取合奉頼候、猶様躰、従是可令申候、恐惶謹言、

(有馬郡)
有民

四月十日

村秀（花押）

(三好長慶)
三筑

御返報

有馬氏は明応五年（一四九六）以降、南御所御料所である有馬郡上津畑代官職を代々請け負っている。しかし、天文八年には完済できていた公用錢の納入も、永禄二年にはままならなくなっている^{四十九}。そこで有馬村秀は【史料8】において三好長慶、さらにはその家臣である松永久秀に南御所への取成しを依頼している^{五十}。有馬氏

が、三好氏を自分たちの利益を守り、荘園領主である南御所へも取成しができる勢力であると認識し、その下へ結集していく様が読み取れる^{五十一}。また、三好氏は有馬氏からの援軍要請を受け播磨国へ出兵しており^{五十二}、有馬氏の勢力拡大を保護する姿勢を示した。このように、三好宗三の段階とは異なり、三好長慶が有馬氏に対して有馬郡の支配を保証した上で支配下に組み込む方針をとったことにより、落葉山城も有馬氏の支配下のまま維持されることとなったのである。

しかし、【史料6】に「湯山古城」とあることには注意をしておきたい。この「古城」という表現が、【史料6】の書かれたと考えられる永禄元年よりも先の時代の時点で落葉山城が古城であったとするか、永禄元年の時点で既に古城となっていたのかは定かにはできないが、本稿においては、後者の解釈を以って、考察を加えておきたい。

ここから考えられるのは、永禄元年の段階において落葉山城は、有馬氏の重要拠点からは外れていたのではないか、ということである。有馬氏がどの城を本拠地としていたかについては、史料上明らかにすることはできない。しかし、当該期の有馬氏は三田城（兵庫県三田市三田町）などの城も保有しており、落葉山城の他に本拠があったと考えられる。そして、【史料6】にあるように落葉山城は「古城」と呼ばれるような、半ば空き城のような状態になっていたのではないだろうか。【史料6】にて語られる経緯に登場する「二之湯兵衛兄弟」は、その名から落葉山城近くの温泉地に由緒を持つ者たちであるのは明白である。有馬氏が空けていた城を大屋四郎兵衛が

奪い挙兵しようとしたところ、有馬氏を支持する在地の二之湯兵衛兄弟が、それを討取ったと読み取れないだろうか。

この点に加えて、残存する落葉山城の遺構より興味深い指摘がなされている。角田誠氏によると、「摂州有馬落葉山古城図」には描かれていない施設が城の弱点部分にみえ、尾根筋上に曲輪を並べただけの単純な縄張りである城に、優れた技法が採用されているとする^{五十三}。そして、これら施設は落葉山城が機能した最終段階である天正年間（一五七三～九二）に織田軍との決戦を前に従来の曲輪を利用しながら、さらに防備を固めるために改修されたと推定されている。先述の本稿における指摘と合わせ、三好宗三の退城後、防衛拠点としての位置づけを失っていたものが、織田軍との決戦を控え、より強固な設備として再び表舞台に登場するという、落葉山城の辿った経緯が浮かび上がってくる。

落葉山城が廃城となったのは、天正七年（一五七九）と考えられる。『信長公記』によると、「四月廿八日、有馬郡まで中将信忠卿御馬入られ」とあり、このころ開城したのであろう。また、『初井家日記』^{五十四}によると、この時落葉山城には「有馬加賀守」なる人物が入っていたという。有馬氏の系図などでは、「加賀守」の名を持つ人物は発見できず、詳細は不明である。なお、この間、前出の有馬村秀の後継となる有馬国秀は、天正二年に荒木村重が伊丹城を攻略した後、「不義」（詳細不明）により自害に追い込まれており^{五十五}、有馬郡守護有馬氏嫡流は途絶えている。その後は、庶流の有馬則頼がかつての淡河氏の居城淡河城に入り、嫡男豊氏が丹波福知山城を経て、

元和六年（一六二〇）築後国久留米に転封となり、近世大名の家として続いていく^{五十六}。「有馬加賀守」も、このような庶流の内のひとつに連なる人物であろう。

落葉山城が廃城となった後の有馬では、羽柴秀吉による戦後処理が行われ、天正七年七月二十四日には、その家臣の仙石秀久が湯山奉行に任じられた^{五十七}。本能寺の変を経て、天正十一年に池田恒興が摂津から美濃に移されて後は、有馬は秀吉の蔵入地となり、以後戦火にみまわれることはなかった。秀吉の湯治場として御殿が建設されることとなったが、軍事拠点としての機能は必要性を失い、落葉山城はそのまま廃城となったのである。

おわりに

以上、限られた範囲ではあるが、落葉山城を取り上げ、戦国期の有馬を巡る状況について検討した。はじめに触れたように、有馬は多くの歴史資料を伝える地であり、中世に発給された文書が伝えられ、同時代の記録においても記事を確認できる。また、本稿で用いたように近世以後の地誌類においても、多く取り上げられている。これらの中から、これまで着目されていなかった事項を取り上げることで、有馬の歴史の新たな側面が明らかになるだろう。

戦国期の有馬は、湯治場として発展をみせ、湯治客が往来する交通の要衝となった。そして、鎬を削る摂津、播磨国の各勢力の狭間で、戦火にみまわれた。今回検討した天文八年の落葉山城の合戦及びその後の落葉山城周辺の動向は、戦国大名の三好氏を中心とした

政局を巡る争乱の中に位置づけることができ、湯治場としての発展とは異なる、有馬の動向が明らかとなった。

本稿においては、課題であった戦国期の有馬の様相について、一部を取り上げたにすぎないが、三好氏や別所氏といった勢力の争いが有馬に影響を与えている様が浮き彫りになった。それにより、さらに広い範囲の史料から有馬の歴史像を復元していく作業が必要であろう。今後の課題としたい。

一 『日本書紀』舒明天皇三年九月、舒明天皇十年、大化三年の条など。

二 玉村竹二編『五山文学新集』第六卷、一九九一。

三 風早恂編『有馬温泉史料 上巻』名著出版、一九八一（以下、『温泉史料』とする）。

四 （天正十一年）八月十七日付羽柴秀吉書状「村上大憲氏所蔵文書」（名古屋博物館編『豊臣秀吉文書集』一、吉川弘文館、二〇一五）。

五 秀吉の湯治の回数、藤井讓治「豊臣秀吉の居所と行動（天正一〇年六月以降）」同編『織豊期主要人物居所集成』（思文閣出版、二〇一一）に拠った。

六 長濃丈夫「豊太閤と有馬温泉」『神戸史談』二二七号（神戸史談会、一九七〇）、白井信義「秀吉と有馬温泉」『日本歴史』第二八四号（吉川弘文館、一九七二）。

七 神戸市教育委員会編集・発行『ゆの山御てん 有馬温泉・湯山遺跡発掘調査の記録』（二〇〇〇）。

八 （天正七年）十一月十七日付仙石秀久書状、天正七年十一月二十六日付羽柴秀吉判物「道場河原町文書」（兵庫県史編集専門委員会編『兵庫県史』

史料編中世一、兵庫県、一九八三。

九 平成十六年に、神戸市北区淡河町淡河にある歳田神社において発見された、秀吉が発給した制札（木札）二枚からは、有馬街道沿いの宿場町である淡河における商業活動などを保護し、市場の振興をはかっていたことがわかる。木村修二・村井良介「史料紹介」淡河の羽柴秀吉制札』『ヒストリア』第一九四号（大阪歴史学会、二〇〇五）、仁木宏「播磨国美嚙郡淡河市庭（神戸市北区）の楽市制札をめぐる一考察」『兵庫のしおり』第七号（兵庫県、二〇〇五）、神戸市教育委員会編集・発行『神戸市指定有形文化財調査報告書 羽柴秀吉制札及び関連文書の調査報告書』（二〇〇五）、長澤伸樹「羽柴秀吉と淡河楽市」『ヒストリア』第三二二号（大阪歴史学会、二〇一二）。

十 『実隆公記』享祿二年正月十八日条、『御湯殿上日記』享祿二年三月八日条。
十一 「有馬縁起」（有馬極楽寺蔵、『温泉史料』に収録）に「天正四年丙子三月廿四日午刻、諸堂仏閣在家悉焼却」とある。

十二 臼井信義「中世の有馬道と湯山の変遷」『歴史地理』第九二巻第三・四号（日本歴史地理学会、一九七五）、渡邊大門「中世における京都から有馬温泉への路程」大阪観光大学観光学研究報『観光&ツーリズム』第十五号（大阪観光大学観光学研究、二〇一〇）。

十三 『蔭涼軒日録』文正元年閏二月十八日条。

十四 永正三年九月十日付赤松氏奉行衆連署過所写「石峯寺文書」（『兵庫県史』史料編中世二、一九八七年）、『大乘院寺社雑事記』永正二年四月五日条。
十五 天正十三年十二月二十六日付羽柴秀吉請取状「余田文書」（『兵庫県史』史料編中世一）。

十六 金剛寺は、宝永七年（二七一〇）版「有馬山絵図」（神戸市立中央図書館蔵、同館貴重資料デジタルアーカイブズにて閲覧）に温泉寺山門前の石段右側に描かれている。また、元文二年（一七三七）版「摂州有馬細見図独案内」（神戸市立博物館蔵、同館編集・発行『有馬の名宝―蘇生と遊行の文化―』（一九九八）に掲載）の同所にも「法華寺」と記されている。

中世争乱の舞台としての有馬 ―落葉山城を中心に―

十七 摂津名所図会刊行会、一九三四。

十八 「岡山大学池田家文庫絵図公開データベースシステム」にて閲覧。
十九 角田誠「落葉山城」橘川真一、角田誠編『ひょうごの城（新版）』（神戸新聞総合出版センター、二〇一一）。

二十 『細川両家記』享祿四年条。

二十一 今谷明『戦国三好一族 天下に号令した戦国大名』（洋泉社、二〇〇七）。

二十二 「余田文書」（『兵庫県史』史料編中世一）。

二十三 下田勉「有馬城」大類伸監修『日本城郭全集』第十巻（人物往来社、一九六七）。

二十四 大永六年十月九日付有馬村則安堵状「善福寺文書」（『兵庫県史』史料編中世一）。

二十五 天野忠幸編『戦国遺文 三好氏編』第一巻（東京堂出版、二〇一三）。

二十六 （天文八年）閏六月六日付別所村治感状「飯尾文書」（『兵庫県史』史料編中世二）。

二十七 「三好家成立之事」（『群書類従』第拾四輯）。

二十八 「摂州有馬文書」（『温泉史料』）。

二十九 「川上氏系図」（有馬余田慈石氏所蔵、『温泉史料』）。

三十 佐藤保「三木城跡・別所氏をめぐる史料と解説」三木城跡及び付城跡群学術調査検討委員会編『三木市文化研究資料 第二三集 三木城跡及び付城跡群総合調査報告書』（三木市教育委員会、二〇一〇）。

三十一 （天文八年カ）十二月五日付別所村治感状「飯尾文書」（『兵庫県史』史料編中世二）。

三十二 『天文日記』天文七年正月十日条。

三十三 渡邊大門「尼子氏の播磨侵攻と赤松氏・室町幕府」『論集 赤松氏・宇喜多氏の研究』（株式会社歴史と文化の研究所、二〇一七、初出は二〇一六）。

三十四 なお、この史料の発給年は『兵庫県史』史料編中世二では、「天文八年カ」とされているが、天文七年発給とすべきことが、渡邊大門「天文七年尼子氏の三木城攻略の史料について」『中世後期の赤松氏―政治・史料・文化の視点から―』（日本史史料研究会企画部、二〇一一、初出は一九九七）にて指摘されている。

三十五 『大館常興日記』天文八年六月二日条、『敵助往年記』天文八年六月条。

三十六 『天文日記』天文八年四月二十九日条。

三十七 宗三は前年十一月に、丹波国守護代内藤国貞の守る同国八木城を攻め落としており（『親俊日記』天文七年十月十五日、十一月十日条）、丹波国にも影響力を持っていた。

三十八 天文八年六月五日付三好政長禁制「清涼寺文書」（水野恭一郎、中井眞孝編『京都浄土宗寺院文書』同朋堂出版、一九八〇）。

三十九 横山重監修『近世文学資料類従 古版地誌編二一 有馬地誌集』（勉誠社、一九七五）。

四十 『親俊日記』天文八年七月十四日条。

四十一 『親俊日記』天文八年七月二十八日条。

四十二 新修神戸市史編集委員会編『新修 神戸市史 歴史編Ⅱ 古代・中世』（神戸市、二〇一〇）。

四十三 高田義久『有馬郡主 赤松有馬氏年譜』（自費出版、一九九七）。

四十四 天文十九年八月十六日付有馬村秀寄進状「教行寺文書」（『兵庫県史』史料編中世一）。

四十五 （永正八年）十二月二十六日付三好神一郎禁制「教行寺文書」（『兵庫県史』史料編中世一）。

四十六 天野忠幸「摂津における地域形成と細川京兆家」『増補版 戦国期三好政権の研究』（清文堂出版、二〇一五、初出は二〇〇六）。

四十七 小林基伸「有馬郡守護について」『大手前大学人文科学部論集』第二号（大手前大学人文科学部、二〇〇二）。

四十八 年未詳四月十日付有馬村秀書状「宝鏡寺文書」（『兵庫県史』史料編中世八、一九九四）。

四十九 天文八年十月付摂津国上津畑公用銭納状、同年十二月五日付摂津国上津畑公用銭納状、永禄三年一月二十日付恵聖院雑掌道意公用銭請取状案「宝鏡寺文書」（『兵庫県史』史料編中世八）。

五十 年未詳四月十日付有馬村秀書状「宝鏡寺文書」（『兵庫県史』史料編中世八）。

五十一 天野忠幸「三好氏の摂津支配の展開」『増補版 戦国期三好政権の研究』（清文堂出版、二〇一五、初出は二〇〇七）。

五十二 『細川両家記』天文二十三年八月二十九日条。

五十三 同前註十九。

五十四 野々口政太郎、小林敬造、萩原寛太郎校訂『初井家日記』（篠山毎日新聞社、一九三一）。

五十五 『伊丹荒木軍記』。

五十六 『寛政重修諸家譜』。

五十七 （天正七年）七月二十四日付羽柴秀吉書状案「浅野文書」（『兵庫県史』史料編中世一）。

Arima as the Stage of Medieval Conflict, with a Focus on Ochibayama Castle

Shun Miyoshi

Arima, which is located in Kita Ward of the city of Kobe, is one of Japan's leading hot spring resorts, with a long history. The main phase of its development occurred during the Middle Ages, peaking after it came under the control of Toyotomi Hideyoshi during the second half of the sixteenth century. However, Arima was at the center of disputes during the period of its development as a spa area. One of the scenes of these disputes was Ochibayama Castle, only the ruins of which remain. Historical documents, though limited, also reveal that Ochibayama Castle was the scene of conflict. There is evidence of a battle that occurred in the first half of the sixteenth century when Miyoshi Sosan was the castle's owner. This battle was fought by forces based in Settsu and Harima. After Miyoshi Sosan's departure, Ochibayama Castle came under the control of the Arima family and was no longer an important base. Ochibayama Castle was kept in a state of readiness for the invasion of Oda Nobunaga, but Arima and neighboring areas were decimated and Ochibayama Castle was abandoned. Arima's history can be deciphered by consulting ancient historical documents and records and by examining the geographical features of the Edo period. I believe that a wider range of historical images can be retrieved through an analysis that is not confined to Arima's development as a hot spring resort.

Restoration Report on the Portrait of Oda Nobunaga designated as Important Cultural Property

Shun Ishizawa

The Portrait of Oda Nobunaga (dated to 1583), which is designated as Important Cultural Property, was recently restored by the Kobe City Museum. This report outlines the restoration process and presents observations relating to the preservation of this work. The first observation relates to the use of Ura-zaishiki (reverse coloring) in the painting. The colors that were applied on the reverse side of the silk have been well preserved and have not faded. In addition, the portrait was painted using the same color types on the front and the back. Second, after the painting had been cleaned, the Mokko-mon (the Oda family's crest) on the Sokutai (full traditional ceremonial court dress) was clearly visible. Brushwork was applied to restore damaged parts of the painting. Compared with the other portrait of Nobunaga Taiun-in, Kyoto, owned, the portrait of Nobunaga in Kobe may originally have been more decorative. As suggested in this report, which presents the first findings of ongoing research on the portraits of Nobunaga, it is possible that the memorial portrait in Kobe is part of a canon of portraits of Nobunaga.